

「半分、黒い」 使徒言行録 10：9～23

I 導入部

おはようございます。6月の第四日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと心を合わせて、私たちの救い主イエス・キリスト様を賛美し、礼拝できますことを感謝致します。

3週間前に、ナザレンの韓国、台湾、日本の代表者が集まり、日本において三カ国会議が行われました。アジアの三カ国での宣教協力や交わりを主体とした会議です。水曜日は、日本のナザレン教団本部、神学校、目黒教会、三軒茶屋教会、尾山台教会を訪問して、良きお交わりが与えられました。夜は、食事の後、夜の東京タワーに上りました。私は夜の東京タワーは初めてでした。とてもきれいで、雨の中でしたが、多くの観光客の方々が来ておられました。韓国、台湾の代表者の方々も喜んでおられました。

夜景はきれいなのですが、東京の本当の姿を見ることはできませんでした。電気によって、ある程度の明るさがあり、大体の風景はわかりますが、やはり暗いので、本来の東京の町は、明るい時に見ることができるのだと思うのです。半分、暗かったのです。

本来、見えるべきことが暗さのゆえに見えないことがあります。それは、明るさの問題だけではなく、私たちの心の問題で、あるいは偏見のゆえに、相手を受け入れることができないので、親しい交わり、関係が築けないことが、私たちにあるのではないのでしょうか。

今日は、使徒言行録10章9節から23節を通して、「半分、黒い」という題でお話し致します。

II 本論部

一、違いがわかるクリスチャン

ユダヤ人は、救いとは神に選ばれたユダヤ人だけに与えられるものだと信じていました。彼らは、自分たちが神様に選ばれたという選民意識がとても強く、ユダヤ人以外の人々、つまり、異邦人に触れたら、彼らのけがれが自分にも及ぶとって異邦人と関わること、交わることを忌み嫌っていたのです。ユダヤ人は、自分の清さを保つために、異邦人から、つまり汚れたものから分離しなければならないと考えていたのです。イエス様の弟子たちでさえ、そうであったようです。また、救いはユダヤ人だけのものであって異邦人は神に裁かれるものであるという考えでした。ですから、キリスト教もユダヤ人にしか宣教してこなかったわけです。けれども、神様のお心は、お考えは、全ての者が平等に、全ての者が救われるということでした。

旧約聖書には、確かに汚れたものとの分離を命じています。しかし、イエス様が、最も貧しい者として誕生され、罪ある人間の世界に介入され、イエス様は、律法を全うするために来たと言われました。ですから、旧約の律法に生きるユダヤ人たちに、神様の本当の

お心を示されました。神様はユダヤ人だけではなく、異邦人も、そして、罪人さえも愛しておられることを語られたのです。そして、罪人、徴税人、遊女と言われる人々と食事をし、交わったのでした。だからこそ、ユダヤ人の指導者たちとの間に闘いがあったのです。

そのような中で、イエス様の弟子たちは、ユダヤ人としての分離の生き方をしつつも、イエス様の新しい教え、異邦人に対する神様のお心、罪人に対する神様の愛に触れたのです。ですから、使徒言行録9章43節には、「**ペトロはしばらくの間、ヤッファで皮なめし職人のシモンという人の家に滞在した。**」とあります。皮なめし職人とは、動物の死体に触れるわけですから、ユダヤ人にとっては忌み嫌われていた職業の一つでした。ですから、普通、ユダヤ人は、そのような人の家には決して泊まりません。ユダヤ人であるペトロが皮なめし職人の家に泊まっているということは、イエス様の教えによって、少しは頭が柔らかくなっていたのかも知れません。

日本人は、葬儀でも、相撲でも塩をまくという、汚れに対して敏感です、日本のキリスト教会も、ユダヤ人と似ている所があるのかも知れません。キリスト教以外、クリスチャン以外は受け入れないというような傾向があるように思います。クリスチャン人口、1パーセントの日本で、クリスチャンに出会うと、とても安心します。クリスチャンの医者があると聞けば、腕がいい、悪いよりも、クリスチャンかどうかの方が大切なのです。仕事関係でも、相手がクリスチャンだと心開きやすいと感じるのではないのでしょうか。その反面、クリスチャンでない人々に対して、警戒心が強く、線引きをしてしまうような傾向があるのだと思うのです。私たちクリスチャンは、付き合いの悪いクリスチャンと言われ、この世から分離の体質を持っていたのではないのでしょうか。しかし、神様の愛はクリスチャンだけに与えられているわけではありません。クリスチャンでない人、全ての人々に神様の愛は注がれているのです。私たちも目を開かれるということが必要なのだと思うのです。

二、神様の言葉の先行

聖書を見てまいりましょう。使徒言行録10章1節から8節には、信仰熱く、神を畏れ、祈るという生活を送っていたコルネリウスというローマの百人隊長に、神様からの語り掛けが与えられ、ペトロを招くようにということでした。彼はユダヤ人が忌み嫌う異邦人でしたが、神様は彼を覚え、彼に語られたのでした。

コルネリウスは、信仰心のあつい兵士に事の次第を語り、ヤッファに3人を送り出したのです。その3人がヤッファの町に近づいた頃ペトロは祈るために屋上に上がったのです。

お昼前だったのでペトロは空腹でした。ペトロは、大きな布のような入れ物が、四隅つるされて、その中には獣や地を這うもの、鳥が入っていたのです。そして、「**ペトロよ、身を起して、屠って食べなさい**」という声がしたのです。空腹のペトロでしたが、彼は、「**主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。**」と答えました。ユダヤ人としてのペトロとしては当然の返答でした。この動物の中には、ユダヤ人にとっては、食べてはならない、と律法で禁じられていた汚れた動物があったのです。ユダヤ人は、たとえ餓死したとしても、目の前にある律法で禁じられた物は食べなかったと言われています。

ペトロはユダヤ人として当然の拒否反応でしたが、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」という声が聞こえました。ペトロには、この事は一度でも衝撃的な事なのに、このように三度もあったのですから、ペトロにとっては、インパクトの強い、忘れられない事柄だったのです。ユダヤ人であるペトロが、今まで神様の掟として。汚れた動物は食べてはならないという掟をしっかりと守り続けてきたのに、神様は自分たちが汚れていると思っていた動物を、「私が清めた」と言われたのです。

神様は、異邦人コルネリオの部下たちが、今ペトロを訪ねて近くまで来ている状態で、ペトロにこのような幻を見せられたのは、異邦人の来客を迎えやすくするための神様の計らいだったのです。この幻がなければ、神様のご配慮がなければ、ペトロはコルネリウスから送られた3人を受け入れなかったはずです。

私たちも、クリスチャンとして、クリスチャンとして生きるためには、受け入れられない何かを持っているのかも知れません。隣人を愛せよ、と聖書は語りますが、いろいろな理由を挙げて、隣人を愛さないでいることはないでしょうか。やはり、私たちは、聖書、神様の生ける言葉に触れて、神様がどのように語っておられるのか。神様のみ心は何かを知ることが大切な事だと思うのです。神様のお言葉を大切にしたいと思うのです。

三、神様の配慮を受け入れることから始まる

ペトロは、三度も不思議な幻を見て、自分としては、「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」というユダヤ人として当然の考えを3回しましたが、神様は、そのペトロの考え、信仰について、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」と三度戒められたのでした。そして、ペトロが今、三度も見た幻は何かと考えていると、コルネリウスから送られた人々が、シモンの家の玄関に立ったのです。そして、ペトロがここにいるかどうかを尋ねたのです。その時、聖霊が、三人の者が訪ねてきているので、ためらわないで一緒に行くように。神様が三人をよこしたのだ、と語りました。そして、ペトロは、自分の経験や感覚よりも神様の言葉を受け入れ、神様に従おうとするのです。

ペトロは、聖霊の声に従い、下へ降りて行き、自分がペトロであることを示し、どうして、ここに来られたのかを問うたのです。三人は、コルネリウスの事を話し、神がペトロを家に招いて話を聞くようにと天使からの言葉を受けたことを話したのです。23節には、「それで、ペトロはその人たちを迎え入れ、泊ませた。」とあります。ユダヤ人としては、異邦人を自分のいる所に泊ませるといふことはあり得ないことです。しかし、神様は、ユダヤ人であるペトロが異邦人を受け入れることができるように、幻を三度も見せ、神ご自身が彼らを導いたことを語り、ペトロが異邦人を受け入れやすくされたのでした。

ユダヤ人として何十年も生きて来たペトロにとって、特に汚れた物と汚れていない物をはっきり区別してきた者にとって、感情的にも、信仰的にも、常識的にも受け入れることのできない異邦人をペトロはわだかりもあったでしょうが、神様の言葉を信じて迎え入れたのです。硬いしきたりが、戒めが、神様の絶妙な導きの中で、破られたのです。

ペトロは、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」と言われ

ても、はいそうですか、とは簡単に受け入れられるものではありませんでした。しかし、異邦人の人々が、自分を訪ねてくる前に、あのような幻を三度も見たこと、聖霊が彼らを受け入れるようにとの導きに、ペトロは素直に従ったのです。そして、このペトロの従順が異邦人への救いへと導かれるのです。神様は、ユダヤ人だけではなく、異邦人をも救い、聖霊を与え、祝福されるということが証明され、この後、異邦人が中心となるアンテオケ教会が誕生することになるのです。

私たちがクリスチャンであるがゆえに持つ、考えや、偏見というものがあるのかも知れません。律法に生きているところがあるのかも知れません。しかし、イエス様は、律法に生きるのではなく、福音、イエス様の十字架と復活を通して与えられるもので生きるのです。

Ⅲ 結論部

今、NHKの朝の連続小説テレビは、「半分、青い」というタイトルです。このドラマは、「雨上がりの青空を見て「半分、青い。」とつぶやくヒロインの鈴愛の話しです。この言葉は、片耳の障害を抱えながらも後ろ向きにならず、明るくものごとをとらえて生きようとする、主人公のたくましさの表れでもあるように思います。また、そうあってほしいという願いもこめられているのではないのでしょうか。」ですから、「半分、青い」は、前向きなドラマです。しかし、今日の説教題の「半分、黒い」はちょっと、マイナスのイメージがあります。中途半端とも捕らえられますし、半分黒いということは、半分白いということで、全てが悪いかということとそうでもないし、全てが良いかということとそうでもない。私たちのクリスチャンとしての生き方を何か、私たちの信仰を垣間見るような表現だと感じたのです。

ユダヤ人が異邦人に対して偏見を持っていたように、クリスチャンの私たちが偏見を持っているということはないのでしょうか。ナザレン教団以外の人に対して偏見はないのでしょうか。クリスチャン以外の人に対して偏見はないのでしょうか。自分と違う意見の人とはかかわらない。日本人クリスチャンということの中に、分離体質はないのでしょうか。

神様は、全人類を愛されました。聖書は、「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも、正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」(マタイ5:45)とあります。神様は、全ての者を愛し、全ての者の罪を赦すためにイエス様を人間の世界に送り、私たちの罪の身代わりに十字架にかかり、尊い血を流し、命をささげて下さり、そのことによって、私たちの全ての罪が赦され、イエス様が復活されることにより、私たちにもよみがえりの命が与えられたのです。罪の中に生き、滅びに向かっている私たちを神様は愛して下さり、神様の権威とご計画の中で、私たちの罪を赦し、魂を救い、永遠の命、天国の望みを与えて下さったのです。それは、信じる者だけに与えられているのではなく、今、信じていない人のためにもイエス様は十字架で死んで、よみがえられたのです。神様は、イエス様の十字架と復活を通して清めて下さったのです。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」と神様は私たちに語られるのです。

私たちは、先にこの救いに預かりました。神様の愛と恵みを先に知り、体験したのです。ですから、私たちの狭い考えで、自己中心的な思いで、神様のすばらしさを小さくしてしまわないようにしたいと思うのです。私の偏見が、神様の愛の業をとどめてしまわないように、聖書の言葉に日々触れて、神様のお声に従順に従いやすい者と聖霊が導いて下さることを祈りたいと思うのです。

ペトロは、自分の経験、自分の歩んだユダヤ人としての信仰がありました。しかし、ペトロは、自分の感情や経験に従うのではなくて、聖霊の導きの中で、神様の声に従ったのです。神様の後をついて行ったのです。そしてコルネリウスを初め、異邦人と出会い、彼らの上に聖霊が降るのを見たのです。私たちも、この週、自分が神様の先に出るのではなくて、自分の経験や感覚や偏見によって歩むのではなく、神様のお言葉を聞き、神様のお心に従った歩みをさせていただきたいと思うのです。